



|              |                                                                                     |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 編輯を終へて                                                                              |
| Author(s)    | 山本, 檣信                                                                              |
| Citation     | 懷徳. 1940, 18, p. 63-64                                                              |
| Version Type | VoR                                                                                 |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/89061">https://hdl.handle.net/11094/89061</a> |
| rights       |                                                                                     |
| Note         |                                                                                     |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 編輯を終へて

幹事 山本 檣 信

西ひかしむつみかはして榮ゆらむ世をこそい  
のれとしのはしめに、とは紀元二千六百年々頭  
に畏れ多くも 今上陛下の詠ませ給へる御製で  
ある。八紘一字四海同胞の御精神を拜し誠に有  
難い極みである。我々の寸時も忘れてならぬこ  
とは、我々日本人は萬世一系の 皇室を戴いて  
居ると云ふことである。故に只管 聖旨を奉戴  
して、此の興亞の大聖業完遂に邁進せなければ  
ならぬ。而して我々大和民族は、どこまでも正  
義道德を以て根本精神とし、これを以て世界を  
和合して行かなければならぬ。

日本は今や最大の困難と眞正面から向ひ合つ

て、生死を賭して偷安も逃避も許さぬ眞劍勝負  
をやつてゐる。革新の急潮は目に加つて來てゐ  
る。まご／＼してゐると飛んでもないことにな  
る。日本人の本來の心の底から燃え上つてくる  
滅私奉公の精神が實行にうつゝて、各自が邪念  
を去り一心不亂に目前の仕事に勵むこそ本當の  
修養である。國運の消長は、一にかゝつて個人  
の道德や教養によつて自分を造り變へることに  
ある。朗らかに元氣よく活潑に體をきたへ世界  
の檜舞臺に出してひけを取らない自負心自信力  
に富む大國民を鍊成しなければならぬ。氣短か  
ではいけない。我々の次の時代の人を強い者に  
鍛えあげる事が最も重要なことである。たゞ口  
だけでなく實行することである。願はくば現實  
の上に一日も早く理想を實現し幾萬將兵の英靈

を眞に慰めたいものである。

大阪は上古以來、商工を業として自然に發達して來た東亞産業の中樞である。不屈不撓の精神を以て、働き續けて來た町人の住む都會である。故に東亞維新の使命を荷つた我々市民は、最先に立上らねばならぬ。此の光輝ある紀元二千六百年は、眞に平和な世界の新しき秩序を建設する爲めに、勇しく戦ふ芽出度き門出の歳である。而して 宸襟を安んじ奉り、以て生を日本に受けた喜びに報ひなければならぬ。

此の會誌は大阪の地に諷誦の聲を絶たぬこと三百年、精神の剛健と國威の發揚とに努力し來れる古き傳統に生きる懷徳堂の門をくぐりたる聽講生によつて組織せる堂友會の機關誌である。已に號を重ねること十八回、今回は支那學

の權威者たる豹軒鈴木先生、國學の權威者たる澤瀉久孝先生、及び中井家の血統をつぐ中井木菟麻呂先生の特別の御援助による獲難き御寄稿を乞ひ得て、此の時局下に刊行を續け得る聖代の餘澤を感謝し、會員諸兄の銃後國民としての教養に資するところ少からざるを信ずる。茲に昭和の聖代の民として生をうけたる喜びを感謝すると共に、皇軍將士の武運長久と皇國の隆昌とを祈念して止まない。終に前號附録に現懷徳堂所藏の先賢著述目錄を次號に附載する旨、記載されて居たが、同編者事故の爲に他日に譲り、代りに「石菴先生遺稿」を登載することにした、御諒承を乞ふ。